

スターブライト・発達支援センター（非営利特別支援施設）

チームワークで取り組む大切さを学ぶ

お話し：エグゼクティブディレクターのロンダさん他

レポート：小松千尋

★施設概要

Star Bright（スターブライト・発達支援センター）は、幼少期(主に0歳～5歳)から特別な発達支援を必要とする子どもたちとその家族をサポートするために活動する非営利団体です。オカナガン市を拠点とし、全ての子どもたちが必要な発達支援・教育支援を受けられるようにすることを目的としています。

職員の雇用やサービスの費用は Ministry of Children and Family Development(MCFD)との契約により賄われており、その契約は1年ベースで見直しがされています。それ以外にも地域の支援団体や個人の支援者からの温かい寄付によってその活動が支えられています。

センターでは情報の提供、実際の療育を通じて、できるだけ多くの支援を必要とする家族のニーズに長期計画で応えていけるように努めています。セントラルオカナガン地域では2017年3月現在で801名の子どもたちがサービスを受けています。そのうち385名は複数のプログラムを利用しています。72.2%が0～4歳児です。それでもまだ320名がウェイティングリストに載っているのが現状です。

★運営状況

今回の訪問では、個々のプログラム強化を中心としていた前回までと比べ“子どものために、より良い支援を全員で行う”という意識のもと、プログラム同士の連携を重視した新たな取り組みを見ることができました。その代表例が Multi-Disciplinary Team

(MDT)と呼ばれるチームミーティングです。基本的には①2週間おきに開かれる定例会で6人の専門家+1人のカウンセラーが互いに情報共有する場を設け、②子どもの特徴から個々のニーズや支援の必要性を判断し、③具体的な支援体制に入るという3ステップを踏んでいます。



<スターブライト・発達支援センター>

★主軸となるセラピーおよびプログラムの紹介

1. 言語療法

聴く力、話し言葉の理解。発話に必要な口の動かし方。正しい文法に沿った話し方。言葉以外のボディランゲージ、ジェスチャーやサインの理解。必要としていることや考えを伝えるためにピクチャーカードをもちいる方法の習得。遊びの中で順番を守ることや上手にコミュニケーションをとる為のスキルの習得。

2. 作業療法

様々な作業、道具の利用を通じた環境の設定を行う事で、自立作業を促したり、個々の機能を高めたりする療法。

3. 物理療法または理学療法

体力、平衡感覚、感覚と運動の協応力を高める理学療法。筋肉や関節の動きも含め、理学療法士が総合的なセラピーを行う。

4. 障害を持つ乳幼児・学童、

ユースのための乗馬療法

乗馬を通じて障害克服に対する自信と自尊心を育て、同時に身体能力の向上を目指す療法。

5. 乳幼児発達支援

発達に遅延が認められる、障害が認められる、または、その可能性がある乳幼児に対して訪問ベースで支援を行う。

6. 特別支援

身体、コミュニケーション、認知、社交性、感情抑制、行動において遅れや問題が認められる子どもに対し、できる限り通常の保育環境での保育が可能となるように支援計画をたてる。

7. 自閉症児のための行動介入療法

自閉症と診断された子どもを対象に、言葉の有効な使い方やコミュニケーションスキルの習得を促す行動療法を行い、家族やコミュニティにおいて孤立せず積極的に関わっていく手助けをする。

8. 子どもと家族のためのカウンセリング

小学校入学前の児童と家族を対象に、情報提供や周囲との協力体制の構築のためにカウンセリングを行う。問題行動に関するカウンセリングも行う。

★MDT メンバー

1. PT 理学療法士 (1名)
2. OT 作業理学療法士 (1)
3. ST 言語療法士 (2)
4. デイケア・発達支援コンサルタント (2)

5.(カウンセラー) ※普段は仲介役/必要なおきのみミーティングに参加 (1)



<関係者全員がそろってのミーティング>

★チーム制の利点—MDTの3C

①Complexity: 複雑性

個々の専門性を活かして多面的に課題を捉え、子どもや親のニーズに合う支援を考えることができる。ひとつの問題を敢えて複雑に捉え丁寧に対応することで、誰もが安心して受けられる支援体制を整える。

②Consistency: 一貫性

一人ひとりの子どもの現状を全員で共有することで、情報の抜け漏れや重複を防ぎ、効率的に対応できる。新たな課題や急な変更にも柔軟に対応でき、サポートされる側の個々の待ち時間を短縮することができる。

③Cooperativeness: 協調性

定期的にミーティングを開くことでコミュニケーションの強化をはかり、サポー



ト側する側、される側のどちらにとっても安心できる職場環境を目指す。互いに協力することで、単発的でなく現状に合わせた継続的支援が可能となる。

★これからの課題

親の心情にどう向き合うか。早期的な支援が必要な場合でも、親が子どもの障がいを否定し、詳しい情報の提供を拒否する 경우가少なくないのが現状です。必要な支援を必要な人にどう伝え、受け入れてもらえるかが問題だそうです。

★訪問の感想

子どもや親とのコミュニケーションだけでなく、サポート側のチームワークも結果的に支援を向上させるために大切だということ学びました。政府、企業、公共施設といったように個々の支援が独立している日本の保育や福祉の現状を改善するためにも、必要な考え方だと思います。



<施設長のロンダさんと>